
小説恋愛

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説恋愛

【Nコード】

N60120

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

本が好きな人の、ほんの少しの、本の話

（前書き）

あなたはどこでデートをしますか？

僕らのデートは本屋さんだった。

正確な日本語ではないので訂正。デートは本屋さんで行われた。

今では一種のアミューズメントパークと化した、郊外にある大きな本屋で時間をつぶす人も多いだろう。

でも、僕らの過ごし方は普通の人みたいに読みたい本を探し、軽く立ち読みするに収まらなかった。

僕は、本が好きだ。

雑誌だろうが専門書だろうがエロ本だろうが哲学書だろうが、そこには書き手の想いが込められている。

何かを伝えたい、何かを残したい、そういう想いが形になったものが本であると考ええると、線香花火のような最後にはポトリと落ちて終わる人間の一生の中にも、一種の逃げ道があるおうに思えるのだ。

僕は、本を読むことでその書き手の人生に触れると思っている。絶対に会うことのなかった遠い異国の地の人間と、ちっぽけな島国の平凡な僕との人生がクロスする。

「じゃあ、シェイクスピアがお前のこと知ってんのかよ？」なんて意地悪な話はこの際無しにしよう。彼にとって僕がどうなのかというよりも、僕にとって彼がどうなのか、ということのほうが大事なのだ。

そう、本を読むって行為は、書き手のエゴと読み手のエゴのぶつかりなのだ。

「俺の思いよ、世界を駆け巡り万人に届け」

「こんな話知るか、勝手なこと書いてるんじゃない」

閑話休題、話を戻そう。

僕らのデートは本屋さんだった。

私達のデートは本屋さんだったよ。

今じゃ、大きな本屋さんがいっぱいできてるでしょ。

あーゆー大きな本屋さんって、いいわよね。

なんか先人の知識がいっぱい詰まってる感じ。もちろん、どこでもいいことってたくさんあるけど、その中には私にとって宝となる知識があるはず。

そう考えると、本屋さんに行くだけでワクワクしてくるわね。

そもそも、本屋でデートってのもどうかと思うのよ。

だってさ、本を読むって一人でする行為じゃない。周囲は関係ない。強いて言えば、読んでいる私と書き手の二人の関係じゃないかしら。

そう考えるとデートで本屋に行って恋愛小説なんて読んだ日には、浮気を公然としているようなものじゃない。

私は浮気はいやよ。するのめされるのめいや。でも、あの人は本が好きなの。本が好きというよりは、本を読んで知識を得て成長した自分に出会うのが好きといったところかしら。

私は何なのって思っちゃうわよね。ちょっと悲しい気がする。

でも、次のデートも本屋さんになっちゃうのよ。

どうしてかって？

どうしてかだあ？

んなもん簡単だろ。本を読むってことで、俺は俺じゃなくなることができるんだからさ。

俺が例えばヤクザ物読んでも変わらんけど、絵本を読んでてみるよ。俺は子どもになっちまうんだ。

殺人犯の手記を読めば、人を殺した奴になれるし。

天才外科医の話を読めば、俺も人を救えるんだ。

俺が純愛小説だあ？んな柄じゃないけど、でもたまに読んでみるのよ。

けっこいいもんだぜ。心がよ、落ち着くって言うかよ、なんてゆーか、いや、なんて言っていていいかわからんぜ。

実際よ、その女の子の気持ちがわかれば、その女の子になるってこ

ともできるって訳さ。

だからデートは本屋って決まってるんだよ。

だからデートは本屋になっちゃおうのよ。

書き手の気持ちを私は受け止めることができるわ。それは、大きな愛だったり、途方もない悲しみだったりするのだけれど。

本屋に足を運ぶたびに私はいろんな気持ちを受け止めるわ。

すばらしい恋愛の中幸せな娘もいれば、不幸せな結果に終わってしまっ娘もいるのよ。

いろんな本の中で、私はいろんな恋をする。

それは男だったり、女だったり、子どもだったり、大人だったりするのだけれど。

だから私達のデートは、

いや、私のデートは、

いや、俺の、

いや、僕のデートはいつも本屋なんだ。

今日のデートはどれにしよう？

と、一人でつぶやきながら一冊の本に手を伸ばした。

そこに同じように伸びてきた手が。

触れる手と手。

「あつ、ごめんなさい」

「あつ、すみません」

同時に手を引つ込める。

「どうぞ」

「どうぞ」

ドラマみたいな現実が、時にこの世には待っている。

少しばかりのきまづい間の後。

その人は、こちらをまっすぐと見つめながらつぶやいた。

「本、好きなんですか？」

「えっ！しゅきです！」

声が裏返ったけど、その人は優しい目をして微笑んだ。

次のデートは本屋じゃなくなるかも知れない。

(後書き)

という、お話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6012o/>

小説恋愛

2010年10月31日02時39分発行